



# 全国に広がった 千葉氏



千葉市では本年、大治元年(1126)大椎常重が千葉に本拠を構えて「千葉」を名乗り、都市としての歴史が始まってから、890年の節目を迎えました。

千葉常胤は、平家打倒の兵を挙げた源頼朝にいち早く味方し、その後の平家追討・奥州合戦にも息子たちとともに参加、活躍するなど、鎌倉幕府の創設に大きく貢献しました。その結果、北は東北から南は九州まで、全国に領地を獲得することになったのです。

今回は、千葉氏の全国への広がりにも焦点を当て、本家の歴史や広がるきっかけとなった千葉六党について概観した上で、各地に広がった一族のうち、「肥前千葉氏」「相馬氏」「東氏」「奥州千葉氏」「武蔵千葉氏」を取り上げ、現在もそれぞれの地に残る千葉氏に関する史跡や行事などを紹介します。

## ★鎌倉幕府創設に貢献、所領を全国に拡大する(平安時代～鎌倉時代)

千葉氏は、桓武天皇のひ孫高望王の子、平良文を祖としています。良文の子孫は、関東各地に分かれて武士となり、大治元年(1126)、良文から6代後の常重が千葉に本拠を定めたといわれています。

治承4年(1180)、平家打倒の兵を挙げた源頼朝は、石橋山の戦いで敗れた後、海を渡って安房国へ逃れ、房総の武士に加勢を求めました。常重の子常胤はすぐにこれに応じ、以後、平家追討・奥州合戦等に参加し、鎌倉幕府の創設に大きく貢献しました。その結果、千葉氏は全国各地に多くの所領を獲得し、東国の地方豪族から有力御家人の地位へと駆け上がりました。

## ★一族の結束を保った妙見信仰

常胤のひ孫胤綱以後、数代は短命な当主が続き、本家

の統制力が弱まっていたが、その間一族の結束を保ったのは妙見信仰※だといわれています。千葉氏は全国の所領に移住する際、館や城の近くには必ず千葉妙見から勧請した妙見宮を建てて祀っていました。

※北極星や北斗七星を神格化したもの。

## ★蒙古襲来で九州へ、本家が千葉と九州に分裂(鎌倉時代～南北朝)

文永11年(1274)、千葉頼胤が当主の時、蒙古が来襲したため、千葉氏も含め東国御家人の多くは九州へ派遣されました。頼胤とその子宗胤は九州へ出兵、本家は弟の胤宗が継ぐことになり、それを機に本家は九州と千葉に分裂することとなりました。

その結果、南北朝の内乱※では、それぞれが南朝方・北朝方に分かれて戦うこととなったのです。

※足利尊氏の擁立した北朝と吉野にのこられた後醍醐天皇に始まる南朝との分立による全国的な内乱。

## ★本家が滅び、馬加康胤が本家を継承、本拠を本佐倉城へ(室町時代)

15世紀中頃、鎌倉公方(鎌倉の役所の長官)足利氏と関東管領(鎌倉公方の補佐)上杉氏の対立が関東の武士たちも巻き込み、千葉氏も家臣や一族が両派に分かれて対立します。

康正元年(1455)、上杉方であった本家千葉胤直は、足利方であった千葉氏

の重臣原胤房に本拠千葉城を



本佐倉城跡

(写真提供: 酒々井町教育委員会)

# 鎌倉時代前期の千葉氏の県外所領



参考：『千葉県の歴史 通史編 中世』

急襲されました。

逃れた胤直は、子胤宣や弟胤賢などと千田庄（香取郡多古町）の多古城や志摩城に立てこもりましたが、両城は、胤直の叔父馬加康胤や原胤房の攻撃により落城し、胤直ら本家が自刃したことから、馬加康胤が本家を継承しました。また、胤賢の子実胤と自胤は武蔵国に逃れました。ここに千葉氏は、下総千葉氏と武蔵千葉氏の二派に分裂しました。

下総千葉氏は本佐倉城（印旛郡酒々井町・佐倉市）に入り、戦国時代には北条氏方となり、小田原合戦で滅亡しました。

## ★全国に所領を得た千葉六党

常胤は、平家追討・奥州合戦の功績で全国各地に多くの所領を獲得しました。これらの所領は、六人の子（千葉六党）に継承されました。

嫡子の胤正は本家の家督を相続しました。

次男の師常は、下総国相馬御厨（茨城県取手市・守谷市、千葉県柏市・流山市・我孫子市付近）や陸奥国行方郡（福島県南相馬市など）を所領とし、相馬氏と称しました。

三男の胤盛は、下総国千葉郡武石郷（花見川区武石町）を所領とし、武石氏と称し、陸奥国亶理郡（宮城県亶理郡）を獲得しました。

四男の胤信は、下総国香取郡大須賀郷（成田市）や陸

奥国<sup>よしま</sup>好島庄（福島県いわき市）を所領とし、大須賀氏と称しました。

五男の胤<sup>たねみち</sup>通は、下総国葛飾郡国分郷（市川市）を所領とし、国分氏と称し、香取郡<sup>おおと</sup>大戸庄（香取市・成田市）などを獲得しました。

六男の胤<sup>たねより</sup>頼は、下総国香取郡<sup>とうのしょう</sup>東庄（香取市・香取郡東庄町）や三崎庄（銚子市・旭市）などを所領とし、東氏と称しました。



森山城主東胤頼夫婦の墓  
(写真提供: 東庄郷土史研究会)

### ★肥前千葉氏

～蒙古襲来で小城へ、南北朝の内乱では本家と対立～

常胤は、平家追討の手柄により、各地に所領を得ましたが、肥前国<sup>おぎ</sup>小城郡（佐賀県小城市）もその一つです。その5代後、頼胤の時、蒙古が来襲したことで東国御家人は九州への下向が命じられました。頼胤とその子宗胤は九州へ出兵しましたが、頼胤はこのときの戦いの疵がもとで建治元年（1275）に小城で没します。宗胤もそのまま九州にとどまったため、弟の胤宗が本家を継ぐこととなり、ここから千葉氏の分裂が始まりました。

宗胤の子胤<sup>たね</sup>貞は、北朝方として各地を転戦し、南朝方の本家の貞胤が不在であった千葉楯（千葉城）を



祇園祭  
(写真提供: 小城市教育委員会文化課)

相馬親胤<sup>そうま ちかたね</sup>とともに攻撃しています。肥前千葉氏は、室町時代に全盛期を迎えますが、周辺勢力との抗争や一族の内紛により次第に勢力が衰え、戦国期には東西千葉氏に分裂しました。江戸時代には佐賀藩の家臣となっています。

### ★相馬氏

～陸奥国行方郡へ、江戸時代には中村藩(相馬藩)6万石の藩主に～

常胤の次男師常は、常胤から継承した下総国相馬御厨

（茨城県取手市・守谷市、千葉県柏市・流山市・我孫子市付近）を本拠とし、相馬氏と称しましたが、奥州合戦の手柄で陸奥国行方郡（福島県南相馬市など）にも所領を得ました。鎌倉時代末期、重胤の代に奥州へ移り、奥州相馬氏と下総相馬氏に分かれました。南北朝期の建武2年（1335）、千葉貞胤が新田義貞に従軍したため不在であった千葉楯（千葉城）を北朝方の千葉胤貞と相馬親胤が攻撃しています。

奥州相馬氏は、その後も北朝方として活躍し、室町時代には奥州の雄族として勢力を伸ばしました。戦国時代になると近隣<sup>だて</sup>の伊達氏と抗争を繰り返して、義胤、利胤の代に豊臣秀吉に属しています。関ヶ原の戦いでは上杉氏に同調して出陣しなかつ

たため、徳川家康にとがめられましたが、のちに許され、小高城<sup>おだか</sup>から中村城に移り、6万石の藩主として明治を迎えました。

一方、下総相馬氏は、守谷城<sup>もりや</sup>（茨城県守谷市）を拠点とし、戦国時代末には北条氏の他国衆となりますが、小田原合戦後は徳川氏に仕え、子孫は旗本となっています。



相馬野馬追  
(写真提供: 相馬市教育委員会)

### ★武石氏

～陸奥国亶理郡へ、亶理氏から涌谷伊達氏に～

常胤の三男胤盛は、下総国千葉郡武石郷（花見川区武石町）を本拠とし武石氏と

称しました。その子孫は、14世紀初めに陸奥国亶理郡（宮城県亶理郡）に移住し、



涌谷城跡(写真提供: 涌谷町教育委員会)

南北朝の内乱※では、当初南朝に属し武功を挙げましたが、その後、足利尊氏に帰順し本領を安堵されました。

戦国時代には亶理氏と称して活躍しますが、後に伊達氏から養子を迎え、江戸時代には、伊達氏の一門に列し

て本拠を<sup>わくや</sup>涌谷（宮城県遠田郡涌谷町）に移しました（涌谷伊達氏）。江戸時代におこった伊達騒動※※の当事者の一人である伊達<sup>あきむねしげ</sup>安芸宗重は、この子孫です。

※足利尊氏の擁立した北朝と吉野にのこられた後醍醐天皇に始まる南朝との分立による約50年間に及ぶ全国的な内乱。

※※江戸時代前期に仙台藩でおこった御家騒動。歌舞伎『伽羅先代萩』や、山本周五郎の小説『樅ノ木は残った』などの題材となった。

## ★東氏

### ～美濃国郡上郡へ、歌人としても活躍～

常胤の六男胤頼は下総国香取郡東庄（香取市・香取郡東庄町）を本拠とし、東氏と称しました。胤頼の孫胤行は承久の乱での手柄により、美濃国郡上郡山田庄（岐阜県郡上市）を獲得し、胤行の子行氏が美濃に移ると、以後東氏は美濃東氏と下総東氏に分かれました。下総東氏からは海上城（銚子市）を本拠とする海上氏が分流しました。

室町時代には、千葉本家の滅亡に際して、美濃東氏の

当主であった<sup>とうのつねより</sup>東常縁は、足利<sup>よしまさ</sup>義政の御教書を得て、下総に下向し馬加康胤を滅ぼしまし



東氏館跡庭園

(写真提供:古今伝授の里フィールドミュージアム)

た。その後、下総千葉氏との抗争はこう

着状態になり、その間、本国美濃の領地が奪われるなどしたため、常縁は、美濃に帰国しました。

また、東氏は代々歌人としても著名であり、常縁は、<sup>れんがしそらぎ</sup>連歌師宗祇に古今伝授※をしたことで知られています。

※古今和歌集の解釈を、秘伝として師から弟子に伝えたもの。

## ★奥州千葉氏

### ～陸奥国へ、葛西氏を頼るなど複数の伝承～

岩手県から宮城県にかけての地域には千葉氏の伝承を伝える旧家が数多く分布しており、千葉頼胤を祖とするものや宝治合戦※で敗れた上総千葉氏を祖とするものなどが知られています。

これらの千葉氏の多くは、この地域を治めていた<sup>かさい</sup>葛西氏※の家臣として戦国時代を迎えますが、豊臣秀吉の小田原合戦



唐梅館絵巻(写真提供:一関市東山支所)

に従軍しなかったため、領地を没収されてしまいました。

※宝治元年（1247）、執権北条氏と有力御家人三浦氏の対立から三浦氏が滅ぼされた。三浦氏と親戚だった上総千葉氏も滅ぼされ、領地を没収された。

※※下総国葛西御厨（東京都葛飾区付近）を本拠とした御家人。奥州合戦で武功をあげ陸奥国に所領を得て土着した。

## ★武蔵千葉氏

### ～武蔵国へ、上杉氏の武将から北条氏の配下に～

室町時代、馬加康胤が本家を継承すると、滅びた本家の系譜を引く<sup>さねたね</sup>千葉実胤と弟<sup>これたね</sup>自胤は上杉氏の支持の下で武蔵国に移り、これに対抗しました。ここに千葉氏は、下総千葉氏と武蔵千葉氏の二派に分裂しました。

康正2年（1456）、実胤と自胤は、太田<sup>どうかん</sup>道灌の導きにより、武蔵国赤塚城（板橋区）、同石浜城（所在地は諸説ある）に入っています。

その後千葉氏は、<sup>おおぎがやつ</sup>扇谷上杉氏※の有力武将として活躍しますが、大永4年（1524）、上杉氏の<sup>かさい</sup>家宰である太田氏が北条氏に与したのと同じころ北条氏に属したと考えられています。

天正2年（1574）、北条氏による<sup>せきやど</sup>関宿（千葉県野田市）攻めで、後継者を亡くした武蔵千葉氏の当主<sup>のりたね</sup>憲胤に、北条氏政は一族の北条氏繁の三男を憲胤の娘の婿として家名を継がせました。

※室町時代に関東地方に割拠した上杉氏の諸家の一つ。鎌倉の扇谷に居住したことに由来する。

平成28年8月発行

千葉市立郷土博物館

〒260-0856 千葉市中央区亥鼻1-6-1

TEL 043-222-8231